



## 写真術の発明と日本最初の写真製版術

# 『光を生捕る』

史談会開催日

昭和41年(1966年)11月24日

### (1) 世界のライオン

「写真術が発明された当初においても、すでに当時の人々はこの術に対して大きな驚異を感じもはや過去における絵画の如きは世の中から跡を絶つてであろう、と考えたそうである。しかしながら、他日この術が現在におけるが如く重要な“大もの”に発展するとは、おそらく当時の人々は考えなかったであろう」(「写真発達史」序・から)

光の力を利用して、ものの形を描く—それが写真ですが、これは一体、世界でいつごろから始まったかと言いますと、大体240～250年前から始まっているようです。いちばんはじめの人は、ドイツのハインリッヒ・シュルツェ、あるいはイギリスのトーマス・ウェッジウッドとかタルボット、あるいはまたフランスのニセフォール・ニープスという人たちが、写真という名前は使わなかったと思うんですが、とにかく光の力を利用してものの形を描こうとアイデアを起しているいろいろ研究したとうことは事実であります。ところが写真のようなものはできたんだけど、こんにちわれわれが知っている写真と同じものは、それらの人たちはできなかったというほうが本当だろうと思うんです。

それじゃ、誰がわれわれが今日やっている写真術を発明したかと言えば、これはご承知のように、おそらくフランスのルイ・ジャック・マンデ・ダゲールという画家が1839年の8月19日に発表した、この日が写真の誕生日であると思うんです。

私はもう45年も前ですけども、アメリカやヨーロッパの方へ文部省の方から留学を命ぜられまして、3年ばかりあちらの方でぶらついておりまして、その頃から写真のオリジンについて見てみました。で、ただ書物を読むだけでのみそういうふうを感じるのではありません。多くの博物館や、イーストマン・コダックの研究所や、イギリスのローヤル・フォトグラフィ・ソサエティなどの、おびただしい書物の氾濫の中から、どこの国でも、じゃドイツは俺の国で写真を発明したんだとか、イギリスへ行けばタルボットとかいうの

#### ■ 語る人

鎌田 弥寿治 氏

(東京写真大学名誉教授)

#### ■ 【鎌田 弥寿治氏略歴】・

明治16年3月20日、徳島県に生る。

京都帝国大学製造化学科を明治41年に卒業し、京大、東北大講師を経て、大正九年から11年まで写真科学、写真製版技術研究のため欧米在留。

東京美術学校、東京高等工芸学校各教授を歴任、

昭和3年日本印刷学会副会長、

昭和17年日本写真学会会長に就き、各会名誉会員となる。昭和41年まで東京写真短期大学学長に就き、同名誉教授。

著書は「テレビジョン講話」「写真学百講」「写真発達史」など多数。

が発明したんだとか、言いたそうなんです、どうも日本はそういう発明の体験がないのですから公平に考えられますが、やはりこれはフランスのダゲールの1839年8月19日というのが、生意気ながら公平な判断ということになるんじゃないかと思うんです。

それについて、もう40年になりますか、朝日新聞で写真100年祭をやるから、私も講演をしてくれと頼まれました。「ホホウ、写真100年祭というとなんかどうなるのかな。写真は100年にならないのに世界に笑われるじゃないか」というので、その時、私は全世界の写真の歴史とか学問で、いちばんの大将といわれていたウィーンのエーダー先生、それからアメリカのイーストマン会社の研究所長のミース先生、この二人に手紙を出して聞いてみたところが、はっきりま、言わないんですね。写真の発明は一人じゃない、大勢がやったんだ、というようなことをミースさんなんか言っている。ああこいつはやっぱり自分の国に発明者を奪おうとしているんじゃないかな、というような気持ちもし、エーダーさんは、本当の写真の発明者はやはりダゲールとするのが本当であろうというような手紙をくれました。

ま、そういうわけなんです、そういう話をしていると無限に長くなりますからな……

## (2) 世界のライオン

写真の歴史について、もっとも詳しい書物は、エーダー先生の“Geschichte der Photographie”という書物ですが、これを読んでも、昔の写真のことについて私も知らなかった、いろいろ面白いことがたくさん書いてあるんでございます。が、それとは別にフランスのガストンという人が書いた写真歴史書、これはイギリスのジャンサイムという人が英訳したんですが、これにダゲールのことについて詳しく書いてあります。ジャンサイムという人は金持で、これが写真の古いものをうんと集めて、そして不要なものはアメリカのイーストマンハウスというミュージアムにやったというようなこともあります。で訳した人はその金持の兄弟だという人ですが、その本の冒頭には、こういうことが書いてあります。

「フランスの大化学者のアンドレ・デュマスという人が、1827年のある日、パリのソルボンヌ大学で、サイエンスに関する大講演をしたことがある。そしてその大講演が終わった時、聴衆の中からも疲れ切ったような相当の年の婦人がデュマス先生に近寄って、先生まことに失礼でございますが、私は先生が天下の大化学者と承



まわっておりますので、先生にお尋ねしたいことがあるのでございます。実は私はダゲールと申す画家の妻でございます。私の主人は4～5年前からカメラの焦点ガラスに映った自然物のイメージを、人間の手でこそこそ書くというようなことをせずに、なにかその化学の作用によって捉えることができないものかと一生懸命で、もう夜も寝ないのでございます。あまり熱心なもんだから私は主人は気狂いになったと思っておるんでございますが、果たしてそういうことができるものですか」という質問。デュマス先生はケミストリーの大家である。先生しばらく考えて、「それはずいぶん大きな問題でございます」デュマス先生は言葉を続けた。

「私は現在の人間の知識では、そんなことは到底不可能だと思います。けれどもそれが永久不可能かということもわかりません。でありますからあなたのご主人は発狂したんだと断定することはできません」と、デュマス先生はこう答えたそうです。

それが冒頭に書いてありますが、このことは当のデュマス先生がダゲールの死後、ロンドンのイラストレーション・ロンドンニュースという新聞に書いてあった、と自著に書いたそうです。そうしますと、1827年の4～5年前から1839年まで、ダゲールの発明までに16、7年から20年の研究をやったと想像するのが本当だろうと思います。そういう大発明がダゲールによってできたことが、ちょうどフランスの議会で聞かされた。さあ、そんなことができるのか！大変だ、ということで、全欧州に電光のようにその噂が伝わったそうです。

小さい新聞が来たり、大新聞が来て、フランスのダゲールという人が、そういう大発明をしたということを取りあげたそうです。アメリカはまだだっただけですが、欧州では大騒ぎになった。その時ダゲールはほめられると思いきや、極端に悪く言われたそうです。それはそれだけいろいろ理由があって、それまでもそういう研究したけれどもできない、人間の力ではできないと思っていたことをダゲールの野郎がやったということが嘘ではないかという考えが強かったからではないかと、私は思うのでございます。

### (3) 世界に叫ぶ

なにぶんにも、あらゆる物象の瞬間の状況を正確に捕えて、これを千万年の後世までも残す術が発明されたというのであるから、ダゲールは“世界のライオン”と呼ばれたものなんですが、そのライオンに対する当初の悪口はすさまじいものだったといわれます。

その一つなんかは、「カメラの中のイメージをそれを固定するなんてことは、神様が始めた天地創造の法則に違反する」。

なんと、えらいことを言ったもので宗教上から言っても、人道上から言っても許せないことである、というような批評をするのが多い。ライプチツヒの新聞は、「消滅せんとする映像を生けどりにせんとする欲望はすでにドイツ科学によって不可能と明らかにされている。それを敢えてやろうとする考え自体が、すでに神を冒瀆するものである。人間の作った勇ましい機械で田舎者の小僧がそれを固定しようとするのは、ナポレオンが全欧州を征服せんとする野心と同じもので、ダゲールというものは気狂いである、大馬鹿野郎である」というような批評だそうでございます。そういう批評がどこにもここにも出てきたそうでございます。

けれども世間が何と言おうが、ダゲールの大発明というものは嘘ではない。ダゲールの大発明はその当時フランスの天文台の台長で、しかも参議院の議員であったアラゴーという人がはじめて、1839年8月19日にパリの理科大学で発表した。なぜダゲールに代わって発表したか、といえばダゲールという人は画家なんですから大聴衆の前で演説するなんてことはやはりできにくいとみえそこで政治家であり学者である人に頼んで発表してもらったと思えます。

その日は7月の暑い日曜日で、午後3時から始められたということです。そんなたいへんな発明が発表されるということで、フランスの学者、技術家、好事家をはじめ、俺もオレもということで、本当に立錘の余地もないというようなことになったそうでございます。そうしている所へ、アラゴーとダゲールともう一人来たんでございますが、すると群衆は期せずして最敬礼をしたというんでございます。そのときの情景は、フランスはじまってこれほど緊張したことはなかった、ということです。

アラゴーが一番上席へ、その次にダゲールが、ダゲールの前には写真機械が据えられて、その機械で撮った三枚の写真も並べられました。アラゴーが第一声を発したものでございます。

——カメラウォッチャーと呼ばれる光学機械は、イタリアのポルタの発明であることは諸君はすでにご存知でございましょう。この機械の主要部は、一箇の箱と、それに取りつけられたレンズでございますが、そのレンズの作用で、媒介物の形体、色彩を絶対に正しく機械のスクリーンに映し出すのです。それでもし私たちがこの美しい自然物の映像を何らかの方法でそのまま固定することができましたら、われわれ人間の幸福というものは、計り知れず大きなものとわれわれはいままで考えておりました。ところが、遺憾ながらそれ



は過去においては不可能のことでした。

——ところがこの多年の悲願であったことが今回わが国の、かのダゲールによって完成されました。ダゲールは古今東西に類をみないある特別のプレートを発明し、そのプレート上にスクリーンに映った自然物の映像を固定し、しかもその固定された像はほとんど信じられないほど正確にその自然物の像を表現しているのをごさいます。一つお断わりしなければならないことは、自然の持つ色彩を固定することはできないのをごさいます。しかし形はもちろん、光の強弱の反映は数学的正確さで再現しております。ちょっと見ますとそれは凹版画によく似ております。

#### (4) 決め手の現像

——ダゲールが今回作った作品は、ルーブル、シュワルデを結ぶ風景画、ノートルダムの塔を結ぶ景色画、ハスのあるセーヌ河の景色画でありますから、私は試みに拡大鏡でそれを見ましたところ、驚くべきことに自然のどんな微細にいたるまで再現されていることには、私はビックリしてしまいました。

——ダゲールのこの発明が人間社会に捧げる効力はけだし巨大なるものと私は確信します。たとえばこの方法を学者や芸術家や技術家を使用すれば偉大なる価値のあるものと信じます。物理学や天文台の基礎研究にも非常に役立ちます。ダゲールの発明は非常に長い期間の努力の結実であります。ダゲールはこの発明を全世界人類のために公開して誰にでもやらせてやろうという考えを持っているようです。そうすれば全人類の受ける幸福というものは無限と存じます。

——でありますから、フランス政府はダゲールの希望を果たさせてやるとが当然で、私はフランス政府に正当の報酬を要求します。

そんな演説をやったわけです。そうしますとその演説を聞いておった人が、こういう素晴らしいものが発明された以上は、われわれが従来職業にしていた絵画というものは、今日限り消滅してしまうのではないか、というようなことを言っております。それからまたイギリスのハーセルなんていう人もそこへ聞きに行っていたらしいとみえて

——ただいまダゲールさんの発明した実物を見せていただいて感心している。イギリスにもこれに似たようなものにいろんな人が苦心




しておりましたけれども、これを見せられてイギリスが今までやっておったことは、ほんの子供のおもちゃにしか過ぎないものです。というような批評をしたそうでございます。その後、アラゴーがフランス政府に報告したらしいのでございます。それで1839年7月に遡ってダゲールに年金6千フラン（当時の邦貨2400円）を与えるということが、フランス議会ではほとんど満場一致で決まったということです。

そういうわけで世界で初めての写真は発表されたんでございます。このダゲールのダゲレオタイプ法というのは皆さんご承知のように銀の板を非常によく磨いて、これを箱に入れて、ヨードの蒸気にうたす。そうすると銀とヨードが結びついて、ヨ化銀ができる。これが現在の乾板や生フィルムと同じ作用をして、感光物になる。これに撮影し、これを今日でいう“現像”に成功したのが、ダゲールが写真術の真の発明者といわれる理由です。

その現像というものは今と違っていますが、水銀を熱して蒸気にあてると、潜像があるところに沈底する。水銀は光の作用を多くうけた所にくっつくという性質があって、そうして綺麗な写真像が出現する。定着はどうかというと最初は食塩の溶液を使っていました。それ以前に写真に似たようなものをやろうとしていた人たちは、定着というものが滅茶苦茶で、それでダメだったというのが本当だったらしいのです。

ダゲールという人は、元来技術屋であっても、ケミストリーの頭はなかったんですが、この研究を2、3年やってみると、これはケミストリーの頭がなければやっていけないと気付いて、ゼルツエリウスというケミストリーの本を買って来て、夜も寝ないで研究したということです。発明当時ダゲールはすでに56才でして、年金とともにジョン・ドヌール勲章を授けられたんですが、その時フランスの政治家や学者や芸術家が集まって慰安会というのをやった。その時、ある人が「先生、水銀の蒸気できれいな像が出てきた時、一体どんな気持ちになりましたか」というようなことを聞いたそうです。



## (5) 写真製版事始

ダゲールは涙を流して、「こうやってみても駄目、ああやってみても駄目、わたしはうれしいというような興奮を経験せずに生涯をすんでしまうと思っていましたが、昇汞（塩化水銀）をちょっと使ってみたところが像が出てくる。それからカンコーを使ってみたところ

ろがもう少しよく出てくる。それじゃ、なまの水銀を使ったら、パーっと出てきた。その時には何とも言えないうれしさに打たれました」ということを、泣く泣く語ったということです。

発明の噂が世界にザーと拡まったのは、ちょうどダゲールの発表の時にアメリカのモールスという電信電報の発明者ですが、その人が電信電話の特許をフランスに売りに来ていたんですね。その時にダゲールが発表したんで、モールスがこりゃあ大変だ、ということで、発表当日の詳細を電報でニューヨークに送った。そうしたらニューヨーク・オブザーバーという新聞が書いて、アメリカ全体にスーと拡まった、というのが事実だそうです…。

発明当事のことが長くなりましたが、こんどはその写真が日本にわたってきて、写真がどう始められたかについてお話ししたいと思います。

再三申し上げているんですが、本木昌造さんが明治5年頃に九州から東京へやってきて、今日の活版術のもとをひらいた、というんですが、それについては私は知りません。

それでもなにしろ83になる老人ですから、活版術の古い先生にお目にかかったことは幾人かありました。たとえば築地活版の星野さんそれから野村さんという方にもお目にかかりました。何度もお話しをおうかがいしたこともあるんですが、星野さんなんて人は活版術のほうの方だと思っておりましたが、写真の乾板製造などに非常に苦心なされた方だということを、その後浅沼さんのおじいさんからお聞きしたことがございます。

日本の写真製版の古い人には、私が直接お会いして、お話をうかがったことがあるんですが、また、工場を持っておられる方には、工場も見せてもらったんですが、

その中にはどんな人がいるかという、小川一真、堀健吉、それから陸士出身の小倉俊司、田中松太郎、田中猪太郎などという人がおるんですが、そのほかぼつぼつ知っている人もおりますが、あんまり懇意につきあったというほどでもないんで。

そこで写真製版ということはいまさら私がここでいうまでもなく、コロタイプとか網目凸版、写真石版、それから写真石版の孫のようなオフセットとかグラビアとかが、写真製版の範ちゅうにあるんじゃないかと思えます。それでその私の見たものだけ申し上げておきたいと思えますが…。



どれが古いとか新しいとか申しまして、活版術はいまから550年前に発明されたものですが、写真術そのものは127年にしかならんのでございますから、写真を応用した写真製版は当然活版術に比べ歴史が若いんでございます。西洋からアメリカ、アメリカから日本へ入ってきたんでございまして、日本にオリジナリティというものはないんでございます。コロタイプでもなんでも、どこから来て、それをやっているということなんです。

グラビアなんてものは、歴史は少し古いけれども、それを大成してヨーロッパで盛んになって、日本に入ってきて、朝日新聞なんかで始めたというようなわけなんです。こういうことをやろうと思って始めてみたという人は古い人でも、それが大成して世界に使われなかったら、どんなものかも世界の人にはわからんのも当然のわけです。

## (6) 臨時写真科

写真製版というものは写真術が発明されたあとにすぐ応用されたということではありませんから古いものでも90年前、新しいやつでも50年位前からということでしょうから、日本はどうしてもそれより遅れていると言わなければならないでしょう。

それからコロタイプのことをちょっと申し上げると、だれが最初に始めたかということについては、イギリスのタルボットなんかが始めたという話もありますが、ほんとにこれを大成したというのは1868年（明治元年）に、ジョセフ・アルバートが大成せしめたというんです。大成せしめたということは発明者ではないということですがその前に使えなかったら、どうしようもないということですから。

コロタイプの名前はうんとありまして、日本の雑誌なんかみても、コロタイプじゃなくて、リヒトールック、アーバート版などと言ってありますが、もとをただせばばかげた話でございまして、同じものでも薬品がちょっと違うだけで、世界でも無数の名前があるんでございます。半面がゼラチンでありますから、日本ではゼラチン版とか、孔版とか、ハリ版（ガラス）とか言うっておりました。

コロタイプを誰が日本に輸入したかということについて、私もはっきりは知らないんでございます。印刷局の方がおやりになったとい





う話も聞きますが、それは大きな設備を設けて直接に印刷物を出したのではないだろう、と思うんでございます。それじゃコロタイプを盛んにやり出したのは誰かといえ、小川一真じゃないかと思うんでございます。これは決して断言するわけではございませんが、小川一真という人間は、私と15年間も一緒にいろいろなことをやってくれたんです。私は上野の芸術大学の前身である美術学校に勤めていたんでございますが、あそこで日本で初めての製版科、写真科というのができた。その写真科ができたときなんかは、全く小川一真の力であると言っても過言ではないと思うんでございます。

その頃は美術学校の校長は正木直彦という人でございましたが、私なんかは小僧の境地、青二才の境地でございまして、工芸ケミストリーというのを教える教師でございましたが、金属がどうの合金がどうのと教えていけばいいのが、どういう関係か、道楽で写真や、写真製版のことをやっておったんでございます。それで道楽と本職をはっきりさせろということで正木先生に叱られまして、じゃ写真科並びに印刷科というものを油絵科とか彫刻科といったものと一緒に正式にこしらえてみようというのが、私の青二才の悲願でございました。そこに小川一真が現れて、写真というものを世間ではおもちゃのように考えているが、そんなものじゃない！アメリカではこうだった、と、どうしても官立の高等専門学校に写真科というものを置かなければならんと非常に理解していただいて、議会への請願までしていただいて、それが議会を通過して大正4年に東京美術学校臨時写真科というものができたんでございます。「臨時」というものは、費用がいくらかかるかわからないから「科」と断定してしまったら困るということで文部省が許さなかったということです。

それ以前に、妙なことで蔵前の高等工業学校から図案科が美術学校に移管して結城林蔵先生、伊東亮次先生が来て、図案科と一緒になったわけです。で、蔵前から来た図案科には、製版特殊というのはお前の方で好きにやれ、ということで、大正3年からは製版科というのが独立してできたわけです。今まで私が勤めておりました写真短期大学なんていうのは、ずうーとのち、大正12年にできたんですが、美術学校のそれは、芝浦の高等工芸学校に移り、それが焼けて千葉に移り、移ったまま戻れなくなって千葉大学にくっついてしまって、現在の千葉大学印刷科になったわけです。

そんなことを知っている人はほとんどいないんでしょうなあ…。



## (7) 熊になった話

コロタイプは小川一真が盛んにやったと思われるんですが、小川一真という人は、調べてみますと、万延元年に生まれて、昭和5年に死んでいる。

この人は大体は写真屋さんで通ったんですが、とにかくいまの写真屋さんとは違っておって、はっきりはしませんが、奥さんは板垣退助さんの妹だということを聞いております。なにしろ当事、写真屋さんというのは黒塗りの二頭立て馬車に乗ってカパカパカと、どんな殿様が通っているのかと思うほどでしたね。ずーっと後になって私の家にも人力車に乗ってサーっとやってきましたね。

小川一真がやったことは、京橋にろくじゅん館という、大きなきれいな写真屋があったわけですが、そこで写真を撮ったり、それから新橋のスタジオや、印刷工場も持っていて、コロタイプや三色版をやっておりました。私はその工場を見たのが大正の初めですから、もうそのずっと以前からやっていたと言えるでしょう。

それからまた小川一真の作った“光筆画”というのは有名なもので、雪舟の日本画なんかをそのままコロタイプで印刷したもので、きれいなものがありましたね。色のあるものはあとから着色したのですが。その時にコロタイプの工場を覗いたんですが、コロタイプですから写真の乾板がいるわけなんですが、その当事は日本では乾板なんかない、あっても、キャビネか手札くらいですから、そんなものではどうにもなりはしない。それでイギリスのマリオンとかウエリトンとかいうところから、大きな乾板をわざわざ取り寄せて、それでコロタイプの焼付けをやったということなんです。

「こんなことをようやるわい」と感じましたがこの小川一真の光筆画は、悪い奴が本物の雪舟だと言って売りつけて、偽物騒ぎから訴訟事件まで起こしたことがあるんでございます。それほどちょっと目にはわからないほど、立派にできていたんです。

そのようなこととか、写真のことも小川一真から直接に聞いたこともあるんでございます。

日光の陽明門なんかを写真に撮りに行って、その時は乾板はなく、湿板を使って撮ったということなんです。どうやって撮るかということなんです。昔殿様が参勤交代で使った駕籠を使って、湿板の硝酸銀なんかを入れて、その中に自分も乗って日光まで行ったわけです。そこで実際に映した写真はよくできていたものですが、



ところが面白いことには、あの時に駕籠がひっくり返って、乗っていた一真先生に硝酸銀がとびついてしまった。さあことだ！ということで外へ出て30分くらい風に当たっていたんですが、ところが顔いっぱいにも硝酸銀がとびついている。そこに日光がどんどん当たったわけですから、みるみる黒くなって、全く黒くなってしまった、と言うんですね。それは石鹸でちょっとやさっと洗たって落ちるものじゃないんですから、10日や20日ぐらいは熊になって暮らして、あの時は困ったよ、ということを書いていましたね。

要するにコロタイプを盛んにやったのは小川一真を除いてはないだろうということなんです。まあ明治29年ですから、日清戦争のちょっとあとから始まったろうと思うんでございます。

私が中学の時、化学の書物に、ヨーロッパの学者の写真が出ておりましたんですが、その写真はコロタイプで、明治39年発行、小川一真の写真版という小さな名が入っておりました。

## (8) みそこし版

話をはしょってしまうようですが、その次に網凸版のことについてですが、これはやはりドイツのアイゼンバーガーとアメリカのアイフの二人が、スクリーンというものをまあまあ完成して、それから始まったと言えるんじゃないかと思うんです。

この網凸版は日本で一番始めの人は、陸軍の堀健吉という人がやり始めたということです。私は堀健吉という人が喜寿の祝いという時に出席して話を聞いた事があるんでございます。その時、アミ目でトーンのあるものを複製しようとしたんですが、どうしてもできなくて、苦心惨憺して“味噌こし”というふるいを利用したところがきれいにできた、という話を聞いたことがあるわけです。それで日本ではじめてアミ版ができたとき、これを味噌こし版と称したわけがわかったわけでございます。これは今から30年ぐらい前のことで、その時にお祝いの銀盃をいただいて、それは今でも持っております。堀健吉という人はたしか堀真二という彫刻家のお父さんだと記憶しております。

網凸版というのは、日清戦争の時には、新聞なんかに出ておったかどうかわかりませんが、その直後からは盛んに使われたということです。そういうわけで、新聞の朝刊に網凸版の写真が載ったのは、まず明治30年頃じゃないかと思うわけです。



グラビア、オフセットということは、歴史が若いわけですから、今更私が申し上げる必要もないと思いますので、私の話しはこれくらいにしておこうと思うんでございます。

「写真術が発明されて以来、今日にいたるまで117年、この間、この術は長足の進歩を遂げ、もはや現今においては、写真術はただ単に物体の瞬間の状態を正確に捉えて、これを永久に保存する術のみでもなく、また写真術はただ単に人間に娯楽を与える行楽の具でももちろんなく、この術は社会の文化を推進する原動力にもなり、人間が自然界の真理を探究するための重要な道具にもなり、さらにまた人間と人間との真の戦争においても、精鋭無比な武器にもなるのである。

この事実は這般の第一次および第二次世界大戦が、立派にこれを証明している。要するに現今の写真術は、その実用的価値においても、また娯乐的価値においても、正に社会と切り離すことのできない重要物になったのである。

かようなわけであるから、写真に関する科学的研究や、写真を利用して人間の福祉を増進することの範囲拡張の研究等々は、将来ますます伸展しその結果として、さらに、さらに写真は今よりも広く、今よりも盛んに世に利用されるであろうと信ずる…」(「写真発達史」序・より)

